

【調査研究】

子育て支援活動「びよびよ」による学び

— 保育・教育実習の学びとの比較から —

田 口 鉄 久

1. 皇學館大学子育て支援活動「びよびよ」について

(1) 活動の概要

平成23年度にスタートした皇學館大学子育て支援活動「びよびよ」は本年（平成26年度）で4年を迎えた。活動は例年幼児教育コース有志4年生約30名が中心に行なってきた（一部に3年生が担当する回もある）。学生は主担当3人、サポート3人の計6人でチームを組んで取り組む。年間の開催日数は実習、試験期間等を除く24回前後で、毎週水曜日の10時から11時30分まで行う。未就園の乳児・幼児とその保護者が対象で、一回あたりの参加組数は10～20組である。適正人数で実施するために隔週で乳児「たまご」（0・1歳）、幼児「こっこ」（2・3歳）のグループに分けて参加を求めているが、きょうだい関係、保護者相互の関係もあり、厳密に分かれているわけではない。

（写真1）3年生の取り組み

（写真2）4年生の取り組み

参加者は限定せず、未就園児とその保護者であれば誰でも自由に参加できる。保険に加入する関係で、サポート学生が参加者名簿を毎回確認して受け付けを行う。参加費用は無料であり、保険料等は大学の予算が充てられる。

運営の実質責任は幼児教育担当教授（平成26年度現在／筆者）であり、教職支援担当助手（元公立幼稚園長）と子育て支援員（元公立保育所長／臨時職員）が学生指導、保育実習室の管理・運営にあたる。

（2）活動の目的

子育て支援活動として保護者、地域に案内をする場合は、①子どもの遊び場、②保護者の交流の場、③学生の実践的な学びの場として、参加を呼びかける。しかし大学としてはさらに、④教育研究活動の場、⑤大学の地域貢献の場としての目的もある。4年生、大学院生が卒業研究、修士論文作成のために観察・聞き取りに入ったり、2・3年生がゼミの時間に参観・参加して子育て支援の意義や子ども理解、保育支援のあり方を学んだりすることもある。

（3）保育実習室の概要

保育実習室は平成22年10月に教育学部実験・実習棟の一階に設置された。保育準備室（事務、会議、機器保管）、テラス・手洗い場、約十坪の芝生園庭（ログハウス・砂遊び場等設置）、乳幼児用トイレ、教材戸棚、倉庫などを備える。

保育実習室は幼稚園・保育所の保育室を一回り程大きくした広さを持ち、ピアノ、ままごと、絵本、積み木等のコーナーがある。実践を伴う授業等でも使用することが多い。

（4）活動の概要

主担当学生3人は実施日に合わせて概ね前々週から活動の企画をし、前週には指導計画書の立案、活動に必要な制作等を行なう。前日には子育て支援員の助言も得て、ほぼ準備を整える。

平成26年度の計画は（実施にあたって一部変更したところもあるが）以下の通りである（表1）。

(表1) 平成26年度 子育て支援活動実施計画表

回	月	日	内 容	主担当	補助	回	月	日	内 容	主担当	補助
							9	25			
①	4	16	学生企画 (こっこ)	A	b		10	1			
②		23	学生企画 (たまご)	B	c	⑭		8	学生企画 (たまご)	C	d
	5	7				⑮		15	学生企画 (こっこ)	D	e
③		14	学生企画 (こっこ)	C	d	⑯		22	親子ふれ合い遊び	E	f
④		21	学生企画 (たまご)	D	e			29			
⑤		28	学生企画 (こっこ)	E	f	⑰	11	12	学生企画 (こっこ)	F	g
⑥	6	4	学生企画 (たまご)	F	g	⑱		19	学生企画 (たまご)	G	a
⑦		11	人形劇等の鑑賞	G	a	⑲		26	学生企画 (こっこ)	A	b
⑧		18	【3年生】企画	Iグループ		⑳	12	3	学生企画Xマス会	B	c
⑨		25	【3年生】企画	IIグループ		㉑		10	学生企画Xマス会	C	d
⑩	7	2	【3年生】夏祭り	IIIグループ				17			
⑪		9	【3年生】夏祭り	IVグループ			1	7			
⑫		16	学生企画 水遊び	A	b	㉒		14	学生企画 (たまご)	D	e
⑬		23	学生企画 水遊び	B	c	㉓		21	学生企画 (こっこ)	E	f

※ A～G (a～g) は担当学生グループ (3人) を示す。

子育て支援活動は10時から11時30分までである。前半は親子で、あるいは学生と子どもが自由な遊びを行う。その後11時を目途に遊びの場を片付け、全体活動に入る。活動内容はすべて担当学生の企画によるものであり手遊び、歌あそび、リズム遊び、パネルシアター、人形劇などを取り入れた“親子ふれ合い遊び”“季節をテーマにした遊び”“行事に合わせた活動”を行うことが多い。以下は大まかな日程である (表2)。

学生による活動が概ね終了する11時20分頃、子育て支援員が保護者へ数分間まとめの話をする。その後学生は退室する親子を見送り、教員・支援員を交えた反省会に臨む。

学生が企画した昨年度 (平成25年度) の活動は以下の通りである (表3)。

(表2) 子育て支援活動 日程表

時間	9時～ 9時30分	9時30分～ 10時	10時～ 11時	11時～ 11時20分	11時20分 ～30分	11時30分 ～12時
内 容	保育実習室 準備	駐車場案内 参加受付と 迎え入れ	自由なあそ び(ままご と、積み木、 ボールプー ル、滑り台、 砂場など)	親子ふれあ い遊び(手 遊び、歌遊 び、リズム 遊び、パネ ルシアター など)	子育て支援 員によるま とめの話、 退室親子の 見送り	担当学生と 教員スタッ フとの反省 会、その後 12時30分ご ろ片付け終 了

(表3) 平成25年度 子育て支援活動内容

回	月・日	主な活動内容(親子ふれ合い遊び、歌あそび、劇など)
1	4.17	パネルシアター「約束のお花見」「バスにのって」
2	4.24	「ころころたまご」「たまごマラカス」2年生の楽器遊び
3	5.15	しゅりけん忍者の劇、リズム遊び「しゅりけん忍者」
4	5.22	馬の親子の劇、歌あそび「おうまのおひざ」
5	5.29	パネルシアター「まねっこはみがき」「リズム遊び」
6	6. 5	かえるの合唱、カエルのふれあい遊び
7	6.12	手遊び「のねずみ」、人形劇「三匹のこぶた」他(外部講師)
8	6.19	創作劇「宇宙船にのって」、ふれあい遊び「宇宙船」
9	6.26	七夕飾り、パネルシアター「おすもうくまちゃん」
10	7. 3	手遊び「ぺろぺろアイス」夏祭り
11	7. 1	ふれあい遊び「大きなたいこ、小さなたいこ」夏祭り
12	7.17	ふれあい遊び「なみなみちゃぷーん」プール遊び
13	7.24	マジックショー「ジュース作り」他、プール遊び
14	10. 9	合奏遊び「虫の声」、表現遊び「もぞもぞダンゴ虫」
15	10.16	(台風による休校)
16	10.23	ビニール袋シアター「ポンタくん登場」、「さつまいも遊び」
17	10. 3	ハロウィン劇「まほうつかい」、英語の歌「あたまかたひざボン」
18	11.13	ふれ合い遊び「もみもみもみじ」、バルーン遊び(外部講師)
19	11. 2	きのこの寸劇、ダンス「ドコノコキノコ」
20	11.27	「やきいもグーチーパー」の遊び、たき火に関する劇
21	12. 4	「あわてんぼうのサンタクロース」の楽器あそび

22	12.11	ハンドベル「きよしこの夜」「ジングルベル」親子ふれ合い遊び
23	1.15	白雪姫の小人の劇，ハイホーの親子ダンス，サンタ登場
24	1.22	あんぱんまんの劇，手遊び

(5) 実施後の反省会

実施後は3人の主担当学生，3人のサポート学生，3人の教員・支援員で，約20分の実践会を行う。

学生は各自の取り組みを振り返り，感想を含め成果と課題を語り合う。また，教員・支援員は当日の学生による支援内容，方法，子ども理解，保護者対応などについて指導・評価を行う。

学生は反省会の内容を備え付けのノートに記録すると共に一週間を目途に所定の「振り返り記録」を提出する。今回の調査研究の基になったものは学生の「振り返り記録」25年度・26年度（4～7月）分である。

2. 調査研究課題設定の理由

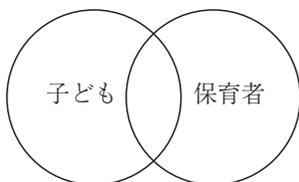
保育士，幼稚園教諭，認定こども園保育教諭を目指す学生は，大学において専門の学びを修めて，資格・免許状を取得する。各学年平均60名の幼児教育コース学生のほとんどは4年間で保育士資格・幼稚園教諭1種免許状，小学校教諭1種免許状を取得する。大学における学びは上記資格・免許状に必要な幅広い教科目（講義・演習・実習）であり，履修すべき科目は多岐にわたる。実習は5実習（保育所2回，児童福祉施設等，幼稚園，小学校），トータル約12週に及ぶ。

理論と実践の学びを融合させて晴れて幼児教育者として現場へ立つことになるが，実際には，大学の学びと保育・教育実習経験で現場へ位置づくのは学生にとって不安が大きいと思われる。

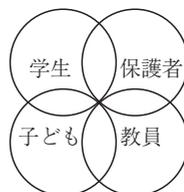
今回取りあげる子育て支援活動「びよびよ」は大学における学びに加えて，学生に幅広い学びと自信を獲得させる活動であることを確認する。筆者はその学びの特徴は①学びの多様性，②学びの協同性，③ゆとりのある取り組み期間の3点であると考え，以下にそれぞれについての説明を記す。

(1) 学びの多様性

保育・教育実習からの学びは1. 子どもからの学び, 2. 保育士・教諭等からの学び, が主である(図1)。一方大学で行う子育て支援活動では1. 子どもからの学び, 2. 保護者からの学び, 3. 仲間(学生)からの学び, 4. 教員・支援員からの学びがある(図2)。子育て支援活動は学びに多様性がある。



(図1) 保育・教育実習の学び



(図2) 子育て支援活動の学び

(2) 学びの協同性

保育・教育実習は指導担当保育士・教諭の指導の下, また各園の指導計画等の制約を受けて, 基本的には一人で取り組む。しかもそこは慣れない園である。不安でありプレッシャーも大きい。

子育て支援活動の企画・立案・準備は学生チームの責任で行われる。企画・実践は主担当3人(+サポート3人)のチームで協力して行う。仲間の支えがある心強さが学生の自信獲得にもつながっている。子育て支援活動の内容はチーム学生による自由な自主企画である。安心の場(ホームグラウンド)で生き生きと取り組むことができる。

(3) ゆとりのある取り組み期間

保育・教育実習では学生は期間を通して常時子ども支援に集中する。子どもが帰った後も片付け, 翌日の準備(環境構成)に追われ, 自宅では日誌記入, 指導計画等の立案など多くの時間を必要とする。多忙な中で継続した学びを得る。一方, 子育て支援活動の主担当は2ヶ月に1回程度である。しかも, 取り組みはその日の1時間30分に限定される。学生はゆとりを持って準備に当たり, 新たな企画に思いをめぐらす。

筆者は上記のような学びの特徴をもった子育て支援活動を通して学生が通常では得がたい学びと自信を獲得していると感じてきた。それを図示すれば以下の通りである（図3）。



（図3）子育て支援の学びの特徴

今回学生の「振り返り記録」の調査研究に取り組むことを通して、これらの学びを全体的に整理する。

3. 調査研究の方法

「振り返り記録」はすべてデータ化し、分類に当っては各項目に数個の下位カテゴリを置き、回答ごとに分類・整理した。

平成25年度子育て支援活動に取り組んだ主担当学生が提出した「振り返り記録」は60人分である。なお学生は全項目に回答する必要はなく、選択して回答する。

- （1）指導計画案の立案について（26件）
- （2）当日までの準備について（31件）
- （3）当日の指導・支援について（24件）
- （4）保護者との関係性について（31件）

平成26年度（4～7月）子育て支援活動に取り組んだ主担当学生が提出した「振り返り記録」は41人分である。ただし複数カテゴリにわたる回答があった場合は分割して分類したものもある。一部に無記入項目もあった。

- （1）子どもから学んだこと（44件）
- （2）教員から学んだこと（37件）

上記合計193件を分類・整理することによって、保育・教育実習とは異なる「学生による学内子育て支援活動の学び」の全体像を明らかにする。

4. 結果と考察

(1) 指導計画案の立案について

①指導計画案立案の負担感が少ない（10件中3件掲載）

ぴよぴよは一連の流れがある程度決まっているところがあり、何をするのか考えやすいように思います。

実習のときより簡潔な指導案だった。全部指導案どおりにはいかなかった。

今までの先輩方の指導計画の記録から過去の活動内容を知ることができ、また不明な点は参考にしながら計画を立てることができました。

②チームで立案できる（7件中2件掲載）

実習では自分ひとりで考えて指導計画案を立てなければならぬから不安が残るが、ぴよぴよでは他の二人の仲間と案を出して決めたから、最善と思える計画になった。

実習では一人で立案していましたが、3人チームで行うことにより、自分だけでは思い浮かばないアイデアもあり、チームのよさを改めて知ることができました。

③新たなことへ挑戦ができる（5件中2件掲載）

今回は水遊びの活動があったため、環境設定や保護者の方への声かけの部分を事前によく考えました。特にプールはどこに配置すれば、保護者の方が周りで見られているのかということに気をつけ、プール後の着替えについてもどれくらい必要か話し合いました。

子育てで支援のよいところは自分のしたいことに迷わず挑戦できる場所ではないかと思います。やはり実習だとどうしても「挑戦」より「確実」の道を選んでしまうからです。

④困難なこと、その他（４件中２件掲載）

当日になってみないと誰が参加するのか分からないので、活動（内容）を決めていくのが難しいと感じた。

実習では年齢が決まっていたがびよびよは年齢が多少異なるので、少し難しいと感じた。

考 察（１）

１時間30分という限定された場面における指導計画案を簡潔に立案するため、負担感が少ないことを述べる学生が多い。また実際の保育支援にあたっては指導計画案の柔軟な運用が認められるために、伸び伸びと指導が行えることを報告している。

指導計画立案に当って学生は相互に相談することによって自分には無い豊かな着想を得ること、新たな保育に挑戦できることも報告している。学生の若い感性を發揮した新しい保育を創造する場になっていることがわかる。

課題として、不特定子どもに対する支援の難しさをあげる。

（２）当日までの準備について

①ゆとりをもって準備・練習が出来る（14件中３件掲載）

実習と比較して、準備に使った時間は長かったように思います。また準備は複数人でできるので、作るものなどは早くできました。また、飾りつけなども考えを出し合って工夫することができました。

仲間と相談しながら一つのものを作り上げるので、よりよいものが作れたと思います。

実習中は責任実習の準備や日誌などがあり、とても忙しくその合間をぬって使う道具などを準備していましたが、今回（子育て支援活動）は時間がゆっくり取れたので、納得がゆくまで取り組むことができました。

②チームで取り組むことができる（８件中２件掲載）

実習では一人で全部行っていたので、どうしても考えが固まり、行き詰って

しまうことがあった。ぴよぴよは3人ですのでより多くの案が出て、視野も広がり、勉強になった。

実習のように一人ではなかったのでメンバーと協力・分担して準備することができた。

③現場の仕事への気付きがある（3件中2件掲載）

幼稚園教育実習時に運動会の準備を手伝わせて頂く機会がありました。飾り付けや当日の動き等、あらかじめ先生が詳しく教えてくださっていたためスムーズに動くことができましたが、それはあらかじめ先生方が話し合ったうえで、私たち実習生や保護者さんが動きやすいようにしていただいていたのだと実感しました。

今回は練習時間が短く十分検討できないところもありました。しかし現場へ出れば短い時間でクオリティの高いものを子どもに提供していかなければならないので、短期集中でアイデアを出し、よりよい保育にしていけるように頑張りたいです。

④困難なこと、その他（6件中2件掲載）

3人グループで取り組むため、準備をするために集まる時間がなかなか合わず難しかったです。

（夏祭り用の）作るものが多くて大変でした。

考 察（2）

保育・教育実習では学生は慣れない環境に入り不安な中、過密なスケジュールに従って孤軍奮闘して成果をあげなければならない。それに比して本学子育て支援活動は、主担当としては2ヶ月に1回程度、しかも3人のチームで取り組む心強さがある。ここで生まれるゆとりが環境構成（保育のための準備）の充実につながるとして、保育・幼児教育現場とは異なる学びと考えられる。

また、現場で必要とされる段取りの良い仕事の協働も学んでいることが分かる。課題としてはチームとして足並みを揃えることの難しさを訴える一部学生が

いたが、これも一面では貴重な学びと考えることができる。

(3) 当日の指導・支援について

①チームで指導・支援に臨むことができる（10件中2件掲載）

実習で部分保育や研究保育を行う場合、先生方に評価されるという緊張感・不安感があるが、びよびよは評価されるというよりは、先生方や保護者に見守られているように感じた。そのためさほど緊張せず、ずっと笑顔で子どもとかわることができた。

指導・支援を一人でするわけではなく、何人かで補い合っているため、十分に子どものことを見守ったり、関わったりすることができる。

②保護者の支えがある（6件中2件掲載）

子どもだけでなく、保護者もいるので、保護者に助けられることがある。

保護者の方が一緒にいたことから、言葉使いや説明の仕方など、実習では体験したことのないものだった。

③困難なこと、その他（8件中3件掲載）

保護者が目の前にいるということから、どのように子どもたちに関わっていくべきなのかとても悩みました。

実習であると子ども一人ひとりの性格や興味あることが分かってきます。（びよびよでは）名前と年齢しか分からないので、一人ひとりへの対応が難しいと思いました。

実習ではある程度、数日関わったうえで、保育の実践をさせてもらいますが、びよびよでは当日参加する初めての子どもに対して保育するので、一人ひとりとして十分関わっていない分、指導するのは少し難しく思いました。

考 察 (3)

当日の指導・支援をチームで行うという学生にとっての心強さが、保育・教育実習のように過度の緊張感をもたなくてもよい安心感につながっている。共

に学ぶ仲間や教師の見守りがあることも心強いようである。これらに加え、保護者に支えられ、保護者と共に子どもに楽しい遊びを経験させるという協同意識が、学生の気持ちを楽にさせているようでもある。

一方で保護者と関係を築く難しさを感じる学生もいるが、これこそ保育・教育実習では学ぶことの少ない領域であるので、貴重な実感だと考える。

また、不特定子どもの参加ゆえの子ども理解・支援の難しさを訴える学生もいる。

(4) 保護者との関係性について

①保護者と関わることができる（14件中2件掲載）

実習の時には保護者の方と話をすることが苦手だったのですが、びよびよで保護者の方と話をする機会が増えてくることで、少しずつ話ができるようになりました。何気ない会話から子どもさんのことまで、様々な話をする中で、保護者の方との関係がよくなっていくのだと感じました。

実習では保護者の方と関わらせていただくことは少ないので、保護者の方に積極的に関わりやすい環境にあるびよびよは、とてもよい経験になりました。

②保護者を通して学びがある（6件中2件掲載）

普段実習現場には保護者の方はいません。だから少し緊張してしまうこともありましたが、実際に保護者の方と話してみると楽しくお子さんの話を聞かせてもらうことができました。

子どもの見立て遊びが何を意味しているのか、どういったものが好きなのかなど教えていただき、子どもとの交流を助けていただいた。

③保護者を支え、励ますことの必要性を感じる（6件中2件掲載）

保護者の方も知らない人の多い環境で不安になっていると思うので、私たちからお子さんについて何か伺ってみたりして話しかけていき、落ち着いて子育てで支援びよびよの時間を楽しんでもらえるようにしていきたいと思いました。

実習時にはあまり保護者と関わる機会がなかったため、少し緊張しましたが、

幼児について普段どのような遊びをしているかや、発達状況等多くのことを教えていただき嬉しく感じました。現場では幼児の様子を聞くだけでなく、不安を打ち明けてもらう関係をつくりあげ、保護者にアドバイスしていかなければならないのだと感じました。

④困難なこと，その他（5件中2件掲載）

実習でもびよびよでも保護者に気を遣いすぎてしまい、挨拶をしただけでうまく会話をすることができなかった。

幼稚園実習は1ヶ月間だったので、お迎えに来てくれた親に「いつも〇〇先生の話聞きます」と声をかけてもらうことがたくさんありましたが、子育て支援では初めて参加する親もいて、うまく関わるできませんでした。

考 察（4）

保育・教育実習では担任保育士・教諭が前面に立つ関係上、学生は保護者との関わりは控えなければならない立場になる。しかし、子育て支援活動では、保護者と関わるのが担当学生の役割であるため、学生は自然な形で保護者と関わることになる。そこで保護者と関わるきっかけづくり、方法などを身につけると共に、保護者を通して子どもの育ちや遊びの意味などを学んでいる様子がわかる。

中には、参加に不安をもつ保護者を支援する必要があることや将来保育士・教諭になったときには保護者の不安をどのように受けとめればよいかと、思いを馳せる学生もいる。

課題としては、保護者との関わりを持つことの難しさを訴える学生や、断続的な子育て支援活動の取り組みの中では関係性を築くことの難しさを感じる学生もいた。

（5）子どもからの学びについて

①遊びへの興味，遊び方への気付き（8件中2件掲載）

推定3歳の女兒Hちゃんはウレタン積み木で遊ぶのが好きで、ずっと遊んで

いた。私は積み木というのは積んで遊ぶイメージがあったが、Hちゃんは運ぶ遊びが好きで、運んできては私に「はいどうぞ」と置いていった。こういう遊び方もあるのかと、自分の遊びに対する考え方が変わった。子ども一人ひとりにそれぞれの遊び方があることを学んだ。

ままごとコーナーで遊んでいる姿から、子どもは親の姿をよく見ているのだなと感じました。テーブルの上にお皿を四つきれいに並べていて、並べ終わったらお母さんに「ごはんできたよ」と話しかけていました。子どもは細かなところまでよく見ているので保育者としても子どもの鏡になれるような行動をしていかなければならないと思いました。

②子どもの発達理解（4件中2件掲載）

今回は全員が1歳のお子さんだったが、同じ1歳でも月齢によって子どもの姿が大きく違い、とても驚いた。一人歩きできる子も多かったが、まだハイハイでつかまり歩きが少しできるようになった子も中にはいた。また、言葉の発達もまったく違った。この時期の子どもへは一人ひとりの対応がとても大切だと改めて思った。

2歳の子でたくさん言葉を発する子もいれば人見知りする子もいた。同じ年齢でも一人ひとりの発達に個人差が見られた。

③子どもが安心・安定できる支援（4件中2件掲載）

最初は母親のそばで遊んでいたが、環境に慣れたりこちら側から関わりを持つようになっていくと自分から活発に行動したり、安心したかのように話をしてくれたりする姿が見られた。子どもにとっての安心できる空間が自己発揮や遊びを通しての育ちの姿にもつながることを学びました。

親子ふれあい遊びでは母親に顔や身体を触れてもらうことで、子どもは笑顔になっていて、スキンシップをはかることで子どもは喜びを感じ安心感を得られると感じました。1歳の子なのに、集中して話を聞いてくれていて驚きました。興味関心があることには子どもは集中することを学びました。

④子どもとのつながり方（8件中2件掲載）

まだ話すことができない子どもとふれ合う中で、表情や子どもの行動からその子が今何を考え、感じているかを読み取らなければコミュニケーションできない環境でした。「こうしたらこの子は喜ぶのかな」と手探りながらも子どもの笑顔を引き出すためのふれ合いが少しでもできたかなと感じています。子どもの興味関心をつかみ取れる活動や自分の表情も身につけようと思いました。

どのような計画にすれば子どもたちが参加してくれるのかとても悩みました。カエルになりきって遊ぶことで、とても元気に参加してくれました。子どもは、まず私たちが積極的にふれ合っていくことで心を開いてくれ、そこから信用してくれるようになると思いました。

⑤遊び指導の方法（16件中4件掲載）

おもちゃで遊んでいた男児と関わっていたが、しばらくするとおもちゃに飽きてくるのでそのおもちゃで違う遊び方を見せると、また興味をもって遊びを楽しむ始めた。子どもの様子を見て、時に違う遊び方を提供してみると子どもの興味は続くのだと学びました。

前週の反省を踏まえて環境構成に配慮をしました。てるてる坊主を高いところへ飾るのではなく机のところにつるしてみたり、ブロックやままごとを少し出したりした状態にしました。子どもが一目散にその出ているものに触り、遊びを展開していく姿を見て子どもの目線で環境を考えることの大切さを学びました。教具（遊具）でも反対側に付けてみたり、繰り返し何回もしたりする姿を見て子どもの遊びには決まった型が無く自分なりの考えがあり楽しんでいるのだと思いました。

始めの自由遊びのときに、お母さんにひっついてボーとしている子がたくさんいました。私が「おはよう。一緒に遊ぼう」と言うと“うん”とうなずき、ブロック遊びに取り組みました。このとき声掛けてやっぱり大切だと改めて学びました。保育士は子どもが遊びを行うきっかけを作ることを学ぶことができました。

今回はじめて水遊びの活動をしました。今までの室内での遊び方とは違い、

子どもの中には今日初めて水遊びをするという子もいて少し怖がっている様子もありました。中には水に興味を示し、楽しんでいる子もいましたが不安を感じている子にどのように関わっていくのがよいか難しいと思いました。

⑥安全への配慮（4件中2件掲載）

子どもは何でも口に入れてしまう。準備する物によく気をつけなければいけないことを実感しました。今回は幸いけが等無く終われましたが、もしかしたらけがにつながってしまう危険もあったので、もっと子どもの目線から環境設定をしていかなければならないと感じました。

私たちが考えた踊りは子どもたちも楽しそうに踊ってくれている子もいれば、ほかの事をしている子どももいたり様々でした。夏祭り中に廊下へ出て行ってしまった子どもには気付くことができなかったので、周りをしっかりと見渡すことが大切だと思いました。

考 察（5）

子どもからの学びは大きく分けると以下の二つである。子どもの遊ぶ姿、発達の状況、親子関係など「子ども理解」に関する学びと、子どもとのつながり方、遊び指導の方法、安全への配慮など「子ども支援の方法」に関する学びである。これらは保育・教育実習と共通の学びといえる⁽¹⁾。

しかし、学びの具体的内容は保育・教育実習と子育て支援活動では異なる。例えば1～2人の乳幼児とじっくり関わることができること、保護者と乳幼児の関係も含めて理解できること、その日の子育て支援活動全般に責任をもって当ることなど、通常の保育・教育実習の学びとは異なる学びを得ていることが分かる。

3年生は(4)「子どもとのつながり方」に慣れていないためか手探り状態でつながり方を試している様子が特徴的であった(8件すべて3年生の記述であった)。また4年生を中心として(5)「遊び指導の方法」を“遊具”“環境構成”“言葉かけ”などを通して工夫しようとする姿もみられ、様々に模索・挑戦している様子が伺えた。

(6) 教員から学んだこと

①保育の方法・技術（14件中2件掲載）

先生方からは様々なアドバイスをいただきましたが、特に間の使い方や状況に応じた保育をしていくことの重要性を学びました。次の活動へ進むタイミングや声の出し方、喋り方を工夫することで気持ちよく活動に移れると学びました。またそのときの子どもの反応を見ながら内容を変更したり追加したりすることも必要だと学びました。間の使い方、臨機応変に対応することは、どちらも子どもの興味をひきつけることに結びつくと思うので、指導案にとらわれすぎないように、来週からの実習でさっそく実行したいと思います。

保育者として保護者に関わる姿勢、保育を充実するための流れの作り方や演じ方など様々なことを教えていただきました。これからの保育に活かしていただけることをたくさん学びました。現場で働くことの大変さや日常の子どもと保育をするときのポイント（机の拭き方、荷物の置き方など）も教えていただき、授業では学ぶことの出来ない貴重な学びをさせていただいています。

②保健衛生・安全に関する配慮（11件中3件掲載）

企画だけではなく始まる前の準備の大切さも改めて教えていただきました。「おもちゃをなめる子への対策」や「この足場ではけがの恐れもある」など衛生・安全への配慮もたくさん教えていただきました。

子どもの安全を第一に考えることの大切さです。今回ジュース屋さんをするにあたって、先生方に指摘をいただくまでは、ストローが危険などということは考えもしていませんでした。保育をするにあたって、あらゆる可能性を考えることは大切だと思いました。

私たちは水遊びの活動は初めてでしたので、先生方に水の温度や環境の安全性など様々なアドバイスをもらいました。それをこれからどのように活用していくかも考えさせられました。

③保護者との関わり（3件中2件掲載）

N先生と保護者さんとの関わり方がとても勉強になりました。先生のほうから話しかけたり、時には子どもさんをお母さんの代わりに抱っこしてあげたりと自然でさすがだなと思いました。本番までにリハーサルを見ていただき、注意していただいたところを皆で話し合っ改善したところ、本番ではスムーズに保育を進めることが出来、とても楽しかったです。

水遊びをしている際、水に入ることが怖くてお母さんにしがみついている女の子がいました。私はいろいろな玩具を通して子どもが水に興味をもつように働きかけていたのですが、T先生が保護者の方に「お風呂は誰と入っているの？」と声をかけておられ「お父さんとです」と答えると、子どもに向かって「お父さんとお風呂で遊んでいるかな？」と言葉がけをされていました。その後保護者の方に対して「お風呂で遊んで慣れる子もいる」というように伝えられており、玩具だけでなく日常のことも取り入れた言葉がけをしていくことも大切だと思いました。

④保育全般、その他（9件中3件掲載）

実際の現場経験のある先生方に指導していただき、保育者が一つの活動の中にどれだけの思いを込めているか、子どもたちの安全面に対する配慮を行っているかが分かり、とても勉強になりました。私たちは1・2歳児だったらちぎり紙ができるというのを本で見えて活動を行いました。まずは新聞紙をちぎり、指先に力を入れることができるようになるという前段階があることや、のりの使用についても様々な取り組みの上でできるようになることを知り、未就園児に制作を行う難しさを学ぶことができました。

私には持っていない発想やアイデアがあり、新たな知識をたくさん教えていただきました。また、子どもに対する思いや配慮などしっかりしていて、改めでもっと子どもについて学びたいと思いました。また、グループで進めていくにあたって、自分たちで考えるように指示を与えてくれたり、適切なアドバイスをしてくれたり、とても勉強になりました。

先生方からは準備段階から相談を聞いていただき、アドバイスをたくさんも

らいました。保育者になる上で大切なこと、身だしなみや作法などといったことから壁面などどのように工夫するのかを教えていただき、ためになりました。反省会では先生方の視点からご指摘していただき、とても良い経験になりました。

考 察 (6)

教員・支援員からの学びは主に以下の5場面で行われる。1. N支援員を中心とした事前の相談、2. 子育て支援活動中のN支援員の子ども・保護者への自然な関わり、3. 子育て支援活動を楽しみに参加するN栄養学教員の姿、4. 教員・支援員と共に行う実施直後の反省会、5. K教員が行う「振り返り記録」に対する指導コメント記録渡しである。学生はこれら教員・支援員の指導・評価を通して子ども理解の方法、保育の方法・技術、保護者支援のあり方などに関する理解を深める。

中でも、長い保育経験をもつ3人の教員・支援員と共に行う4.「反省会」で学ぶことは大きいと思われる。筆者はここで教科の学びと実践の学びとの結合を意図した指導に心掛ける。学生が教員・支援員から学んだとする(6)－①～④項目のすべては実践的な分野である。4年生は大学での学びが最終段階に入り、実践力をつける方向性を模索している時である。当日の活動を終えて反省会へ臨む学生に対し、我々3人が行う助言は参考になっていることが確認できる。

5. 結果のまとめ

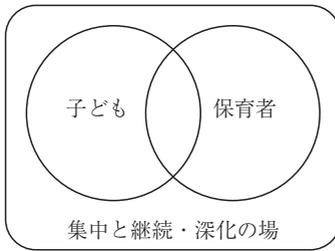
学生の振り返り記録を基に子育て支援活動による学生の193件の学びを再度整理すると大きく以下の6項目に分けることができる。

- (1) 仲間(学生)からの学び 総25件
 - (1)－②チームで立案できる
 - (2)－②チームで取り組むことができる
 - (3)－①チームで指導・支援に臨むことができる
- (2) ゆとりから生まれる学び 総29件
 - (1)－①指導計画立案の負担感が少ない

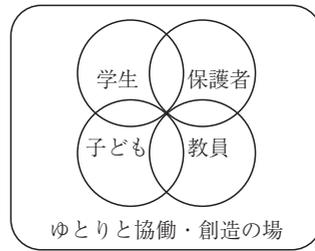
- (1) -③新たなことへ挑戦ができる
- (2) -①ゆとりをもって準備・練習ができる
- (3) 保護者からの学び 総32件
 - (3) -②保護者の支えがある
 - (4) -①保護者の支えがある
 - (4) -②保護者を通しての学びがある
 - (4) -③保護者を支え、励ますことの必要性を感じる
- (4) 子どもからの学び 総44件
 - (5) -①遊びへの興味、遊び方への気付き
 - (5) -②子どもの発達理解
 - (5) -③子どもが安心・安定できる支援
 - (5) -④子どもとのつながり方
 - (5) -⑤遊び指導の方法
 - (5) -⑥安全への配慮
- (5) 教員からの学び 総37件
 - (6) -①保育の方法・技術
 - (6) -②保健衛生・安全に関する配慮
 - (6) -③保護者との関わり
 - (6) -④保育全般, その他
- (6) その他の学び 総26件
 - (1) -④困難なこと, その他
 - (2) -③現場の仕事への気付き
 - (2) -④困難なこと, その他
 - (3) -③困難なこと, その他
 - (4) -④困難なこと, その他

子育て支援活動の学びの特徴は当初考えた①学びの多様性, ②学びの協同性, ③ゆとりのある取り組み期間にあることはいずれも学生による「振り返り記録」の分析・整理からも確かめることができた。子育て支援活動による学びを改め

て統合して整理するならば、以下ようになる。保育・教育実習では集中と継続の場で子どもの学びと保育者からの学びを深化させる（図4）。子育て支援活動ではゆとりと協働の場で保育の創造をめざす中で学生（仲間）、保護者、子ども、教員・支援員から多様な学びを得る（図5）。



（図4）保育・教育実習の学び



（図5）子育て支援活動の学び

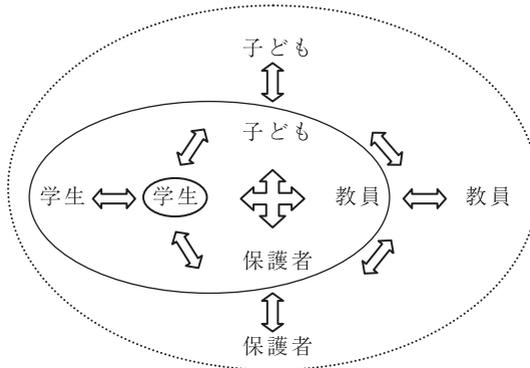
平成27年4月から施行される子ども・子育て支援制度の中で、新たな幼保連携型認定こども園がスタートする。それに先立って告示された幼保連携型認定こども園教育・保育要領⁽²⁾では「特に配慮する事項」の6項目めに①園児の保護者に対する子育て支援、②地域における子育て家庭の保護者等に対する支援、を実施するように努めることを掲げた。この点は保育所保育指針⁽³⁾にも保育所の役割として示されているところである。

保育・幼児教育において園に通う子どもの保育の充実を図ることは園・保育者の責務であるが、それと共に子育て支援に取り組むことも重要な役割になっていることが分かる。

子育て支援の学びは保育士資格科目である「保育相談支援」「相談援助」などでも行われているが、実践の学びは子育て支援活動「びよびよ」を通して得ていると考えられる。本調査研究で確認した学生の学びを今後も子育て支援活動を通して継続・発展させていく。これからの保育士、幼稚園教諭、保育教諭養成にとって重要な学びである。

6. 今後の課題

今回は学生の学びを中心に調査研究した。子育て支援活動には多様な学びがある。学生の学びだけが大きいわけではなく、この活動が継続することによって多様な人々の学び合いが生まれている（図6）。今後はそれらの学びの内容を総合的に明らかにしたいと考える。



（図6）子育て支援における多様な学びの関係図

終わりに

4年生、3年生の幼児教育コースを中心とした学生有志がチームを組んで本子育て支援活動を担い続けている。学生の学びとは言え、よく努力をしていると実感する。学生は必要に応じて保育実習室の壁面や周囲・天井などに季節に合わせた作品を飾って保育実習室を楽しい雰囲気にする。その自覚的な姿を見るとすでに“保育者”としての資質が備わっていると感ずることがある。

子育て支援に関わる関係教員、支援員、参加協力教員に感謝する。教員・支援員の見守りと支えの中で、学生の主体的な取り組みが促されている。併せて教育学部、大学の変わらぬ支援に感謝する。学生の授業との調整、駐車場の確保、運営費の助成、施設管理等細やかな配慮があって今日まで運営できている。

文 献

- (1) 田口鉄久『教育・保育実習による実習生・幼児・保育者の相互成長(2)
— 保育実習Ⅰ(保育所)実習日誌の読み取りから—』平成18年3月
高田短期大学紀要 第24号
- (2) 内閣府, 文部科学省, 厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育
要領』平成26年4月30日
- (3) 厚生労働省『保育所保育指針』平成20年3月28日